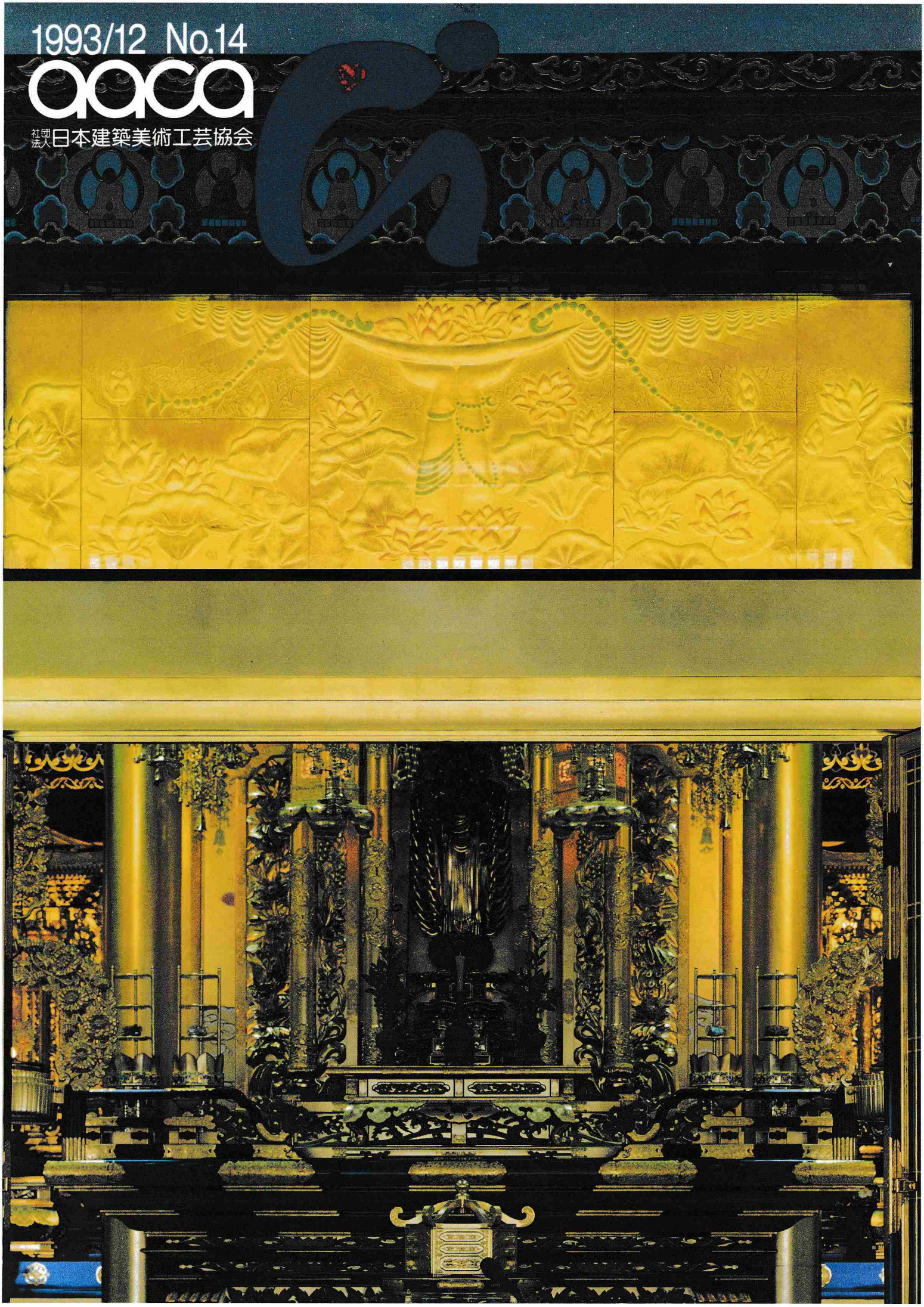
1993/12 No.14

aaca

社団法人日本建築美術工芸協会



CONTENTS

対談
「現代都市と工芸」……1
時代の華一輪
酒井忠康……8
澄川喜一……9
倉本真弘……10
TOPICS……11

■表紙写真
浄土真宗本願寺派〈専念寺〉
撮影：牧　明夫

対談「現代都市と工芸」

大久保婦久子
柳澤　孝彦
日時：1993年7月30日(金曜日)
　　午後3時15分～4時15分
場所：大久保婦久子先生アトリエ

柳澤
以前のご講演でもお伺いさせていただきましたけれども、革という素材が今の先生の作品の中で非常に重要な意味を持っているということと、壮大な宇宙的時空のテーマが作品の骨格に流れていて、それが現代人の心に強いメッセージを送っている点が先生の作品を現代に際立てていると感じました。
素材の革に出会われたのは二十歳ぐらいのときと伺ったのですが、美術という道を歩まれている中での革との出逢いはどのようなものだったのでしょうか。

大久保
とにかく革は好きだったんですけれどもね。初めの出会いが雑貨でございましたからね。そのうちにそれが壁面の仕事に移っていったということは、やっぱり革の質感が好きだったということでしょうね。
大体私は平面的なものは嫌いなんです。油絵描きの通性と言いますか。絹みたいなものでもコーティングしたものよりは縮緬みたいなのが好きだし、木綿もザクザクしたのが好きだし、麻が好きだしね。それから紬が好きだし、何だかそこに変化のあることを望んだわけですね。革の場合にはごく自然にそこにスーッと入っていったんですけれども、やはり好きだから入ったのだろうと思いますね。

柳澤
そういう素材感というのはあまり完璧に仕上げられ過ぎているというものではなくて、風合いみたいなものが感じられるものということですよね。

大久保
そうなんです。

柳澤
そういうたくまざる風合いを潜ませたものに、いつしか人の心は魅力を感じているのでしょう。

大久保
だから多田美波さんがデビューしたときに、コンクリーというものを目標にしたということを伺ったときに、「あっ、そうだろうな」と思いました。やっぱりこれは日本画を志望する人の感覚ではないでしょうね。あの方も我々の後輩で洋画ですけれどもね。

柳澤
一種凹凸のあるものとか、ザラザラしたとか、起伏があるとか、そういうテクスチェアというのは、それがつくられる過程とでもいうようなある種の生の呼吸の痕跡があって、それを嗅ぎ分けるということなんでしょうかね。
あまり完璧にツルッとしてしまっていると何か遠い存在になりがちなところがあります。先生が選ばれるざっくりした感じというのは非常に近親感がありますね。それはつくられた中にも自然な部分をとどめていて、それが潜在意識の中に魅力を結ぶのだと思います。そういう素材としての革という訳ですね。

大久保
そうです。それこそありのままですからね。そして言ってしまえば野の花が好きという感じのようなものでね。あまり手を入れたようなものに魅力を感じない。自然に近いということを好むということかしらね。
革はまた仕事がしやすいということでもあります。

柳澤
しかしそこにはやっぱり制約もあるわけで、その制約と自由さの兼ね合いみたいなところで先生の作品というものが非常に深い感性を見ているとも感ずるのです。既ちそれが隅々まで先生の手によるある種の加工作業を併なって仕上げられたその結果だというところに私どもが心を引かれるところがあるんじゃないかなと思うんですね。そして色という点では、素材が本来持っている色、素材そのものが基調だというところにも、素材と色との宿命的な関係がまた特徴的だと思います。そして色と素材の関係のもう一つの特徴は、金箔です。それは、革という柔らかな素材に、金を含ませるように置いているように私には感じるのですが、金と革との関係にも興味深いものがあります。

大久保
でこぼこしていることをどうとらえるかということでしょうか。日本画などでは描きますときに絹でも紙でも礬水（どうさ）を引きますが、それと同じように我々も仕事の第一番としては礬水を引いて、紙よりも凹凸のある革の表面をある程度

平らにしていきます。
それから仕事をいたしますが、金というのは考えてみれば平面を金属化するわけですね。だけれども金箔そのものが非常にデリケートですから凹凸の中に入っていく。それが一つの柔らかさになるのでしょう。
また金箔は装飾を兼ねた防湿や塵よけの役目もあるのです。

柳澤
とりわけ金の在り方に興味がありますのは金が放つかすかな光によって観賞者の心が歴史的、宇宙的時空に導かれると読めるからです。

大久保
光のトーンは非常に重要だと思います。テカッと光るものを礬水というので抑えます。そういう意味で私は常にかなりのスペースのときには礬水を引きます。

柳澤
金という色の系統と革という色の系統が同じ系統の中でうまく調和する関係にありますね。

大久保
そうです。両方とも暖色系統ですからね。

柳澤
その中によく先生はグリーン系の色彩をポッと配されている。

大久保
緑青ですね。

柳澤
色彩の原理から言えば補色の関係にあるわけですね。そんなに強い補色の関係ではないにしても、それが何かを呼び起こす気配を誘っているかのように私には感じられるのです。

「創世紀」東京芸術劇場　撮影：「新建築」写真部

大久保
やっぱりこの仕事の場合にはグリーンとか代赭色というか、ああいう色以外はどうも合わないような気がいたしますね。ほかの色を使うということは無理だなという気がいたします。暖色とそれから寒色の、革の色に近い接点を持った色なんでしょうね。

柳澤
非常に抑制のきいた、選び抜かれた色と材質だけでつくられていく作品で、しかもテーマが抽象的であるということもあって、非常に深い余韻というものを漂わせているのが、作品の特色ではないかとも思います。それから、古代などにさかのぼっていく歴史的なテーマを展開されておられますが、それはやはりエトルスクの芸術に出会ってからということでしょうか。

大久保
そうです。エトルスクからですね。これは自分の仕事の発展過程の問題で、やっぱりエトルスクがずいぶん影響しているように思います。そして、仕事の中に日本人の血流のどうあるべきかを考え合せながら、呪文に生きた縄文の人々の心象と重ねた世界を、表現しようと思いました。以来私のテーマは大地から生まれる命の尊さや創世の原初に回帰することで心にこみあげてくる希望の光となりました。やっぱり仕事をしておりますときには自分の心がそういう時代に遊んでいるというような感じです。夢の中の夢中というのでしょうか、そういう世界の中に入り込んで仕事を進めているんだなと考えますね。だから楽しいですよ。

柳澤
それでああいう悠久の時間を漂わせているといような表現が表出されるんですね。作品の中にゆっくりと刻まれている時間のテーマに誰しもが深い精神性を感じとるにちがいないと思います。今、私たちはそのことに重要な意味を発見すべきだと思うのです。私も時間というものを建築の中につくり込みたいと思っていることもありまして―。そもそも人間の本質というのは空間というよりは時間なんですよね。ですから、時間性というようなものをテーマの中心に据えられているというところに現代性を観るのです。
だんだん古代にさかのぼるという先生のテーマが、実は現代に向けてのメッセージなのではないかなというふうに感じます。現代というものを非常に客観的に、あるいは心に沈潜して眺める、そういう時間というものが先生のテーマの中に漂っているのではないかなと思います。先ほど先生が古代の夢の中にいて制作をされているというのは、まさにそういうことかなというふうに思われます。

大久保
制作というのは何でもそうであるように、突っかかりのときは大変に楽しくて、そしてそういう出発点から発祥して中頃までいってクライマックスにいって、いいなあと思って最後になってくると「ああー、これではだめだ」という感じがするんですけれどもね。（笑）自分の作品にいつも何か悲観しているんです。

「海の幸」東京芸術劇場　　撮影：「新建築」写真部

しかしまた、時間がたってそれを再び見たときに「あっ、これはよかったんだが、これはだめだ」なんていうものもありますね。

柳澤

現代に存在している人々の、存在の意味というのは、少なくともそれまでの人間の歴史が裏打ちしているわけでして、先生はそこのところをテーマにされていると思うんですね。ですから、現代人にとっては非常に心を揺さぶられるテーマに立ち向かうことになる。

そしてもう一つ重要なことがあります。それは先生が常に建築空間と一体になる芸術というものを目指されているということです。これは非常に意味の深いことだと思います。単に一つのタブローというものの制作に止まらずに、積極的にそういう総合芸術とでもいうのでしょうか、空間というものに意思を向けておられるというところが、特にこの建築美術工芸協会の向かおうとしている方向性からしても興味が深いわけです。特に東京芸術劇場の壁につくられたものでありますとか、それからこの間、見せていただきましたけれども専念寺の欄間のお仕事は建築と一体になったすばらしい芸術だなと思っているのですが、空間や環境といった視座でのお考えはいかがでしょうか。

大久保

在来の日本の家というものは紙と木だと言われておりますよね。材質的に考えてここに我々が入る余地はないのです。最近の建築の様に石の壁などのところに革が合うということ。それから建築家が志向されている思想と、「あっ、これはうまく合うな」という感じがするんです。建築はただの建物ではなくて、皆さんそれぞれのロマンを持って設計していらっしゃいますでしょ。そのロマンの中に一致を見出すということですね。これが何よりうれしいことですね。

柳澤

そうですね。現代の建築というのは確かに伝統的な木と紙の構成を基本には出来なくなっている。従ってそういう硬い材料、構築的な材料による空間には一種柔らかさというものの存在が必然なんでしょうね。

大久保

非常に建築の方がロマンを謳い上げる、その建築の空間に私どもの仕事が的中するという感じがあります。

柳澤

そうですね。何ごともやっぱりロマン…。

大久保

そうです。ただ建てるのだったらこれはマッチ箱でもいいわけですからね。そうではないというところに非常に共鳴するものを感ずるということでしょうね。

柳澤

そうすると、建築と一体になった先生の芸術は、まさしく先頭をきってその空間で謳い上げられているロマンをかなでているという感じですね。専念寺などを拝見しても宗教というものを歴史というものに広げて、人間とそれを結ぶという、テーマの広さを感じます。そしてそういう広さが故に神と通ずる世界を空間化していると思います。神という存在が人間にとって親しいものだといった暖かさが横溢しています。

大久保

欄間に私の仕事をお使いくださるということも、これは発注してくださいました方には奇想天外なご理解だったと思うんです。しかし、私は無宗教でございますけれども、私とすれば自分の考える献ずるということを、天に向かっての感謝の意味として表わしました。

伊勢神宮で芸術家の作品を寄贈しろということがありましたが、そのときにもやはり同じような気持ちでつくりました。常にどういう作品をつくる場合にも、太古、というのは縄文の時代ですけれども、その時を生きた人の心を想います。私たちと同じような気持でも、太古の人たちは天体を見つめて祈りに祈っていたでしょ。そういう純粋さというのか無垢というのか、無宗教というべきでしょうか、そういうような場にあっても常に祈りを込めるというその気持ち。これが我々芸術家に通ずる気持ちではないかと思うのです。

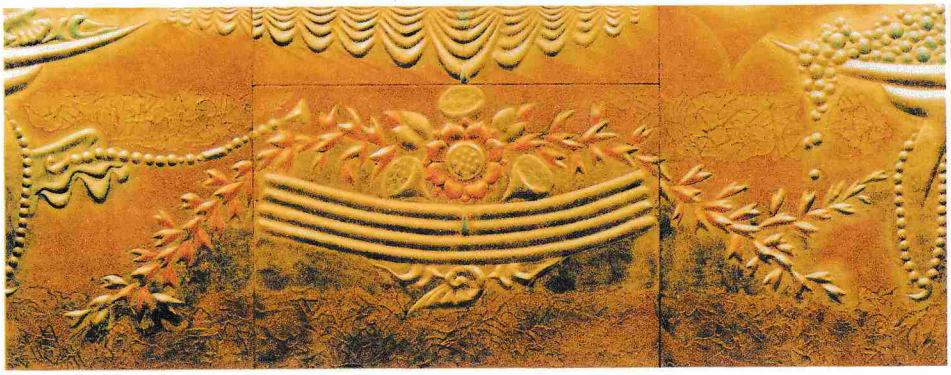
柳澤

人間本来の素朴な祈りという行為なんでしょうね。専念寺の作品もそういう人間の本質的なものに根ざしたところからテーマが展開されているというところに、非常に親しみのある暖かさにつつまれながら無意識の中に自分の存在の起源にさかのぼっていることに気づかされます。宗教画の神をピボットに人の心が展開するのに比べて、人の心の全き中心に立脚した展開がそうさせるのだと思います。そこに感動の源がある訳ですね。先生の作品のどれにも奥へ奥へと引き寄せられる深い求心力がはたらいています。

それから、非常に静謐な雰囲気というものを先生の芸術は漂わせているのですが、それが現代に於ける情報の氾濫や価値感の多様化など、ますます騒々しい時代に安住できなやむ人の心に、本質へ回帰する道程の指標となるのではないでしょうか。その意味で現代人にとって貴重な存在意義を持つものと思います。

大久保

やっぱり私自体の人間性もそうなんでしょうけれども、私はテレビというものを今まで持ったことがないんです。何年か前に芸術団体の賞をいただきました時に、そのお祝いにテレビをというのをことわっているのです。その時なぜと問われて、おたくの会は貧乏だからいらないと言っ



「献花」専念寺

たんです。(笑)それでも既にその段取りになっているのでぜひ受けてくださいと、会の担当の人が3回も訪ねて来られて、それではまあいただこうということになったのですけれども、テレビをかけるのは朝、天気予報を見るだけで一日中かけたことがない。夜も見ないんですよね。(笑)

新聞も学芸欄がいいとのことで日経をいただいておりますけれども、これも朝刊を夕刊と一緒に見るだけで情報はまずゼロ。それから一番困るのが機械ものなんですよね。お風呂を炊くことをこの頃ようやく覚えたんですけれども、どこをひねってどうやっていいのかわからない。そういうようにこの頃の便利なもの、機械にしても情報にしてもわずらわしいんです。そういうものに触れるということが。

だからお客様がここに来てお話をして種をまいていってくれることによって、「ああ、そういうことがあるのか」ということを悟るようなもので、大体我々は浮世からちょっと離れたところにいる人間じゃないかと思うんですよ。

柳澤

いえいえ、高度情報化時代といわれる今は、結局加工された情報のはんらんであって、感動を呼ぶような生の情報交流がなくなって来ている事を先生はいち早く見抜かれておられるということですよ。

大久保

そうなんでしょうか。

柳澤

今の電脳社会ではプロセスというものが全然もう見えなくなってしまっているんですね。そうすると、人間も育ってこない。それはプロセスの中に初めて人間の徳というようなものが育つからです。そういう現代でこそ、作品の中を流れるダイナミックな時のプロセスが、建築空間を強く共鳴させているといえましょう。芸術院賞をとられた「神話」ですが、あれはそういう一連の作品の中の一つの大きなマイルストーンとしてつくられたと思うんですけれども。その神話の発想あたりの実感というのはどんなお考えだったのでしょうか。

大久保

あれをつくりましたときには申し上げたようにエトルスクに夢中になっていた時期でした。そして人間の生活で一番最初に我々が感じたものは太古の人たちが縄文に生きたということ。それから紙をつくり出したということね。天地創造の頃の神話をテーマに大陽や月に祈り、呪術に生きる古代人の生活風景で、地平線は紙、ひとしづくの露は天空からの報せを示します。大地には5角形の銀の箱が紙の筒を受入れていて、天の声に反応してくるっと回って将来へ向かう物語を開くというものです。

柳澤

歴史の時間が流れているという実感が伝わって来ますね。

大久保

私の作品の中に天から三角の布が降りてくるものがありますが、それは天地創造の一つの気というものの表現なんです。

柳澤

貝塚も出てますね。かつての人々の生活の跡とか、臭いを表徴しています。

大久保

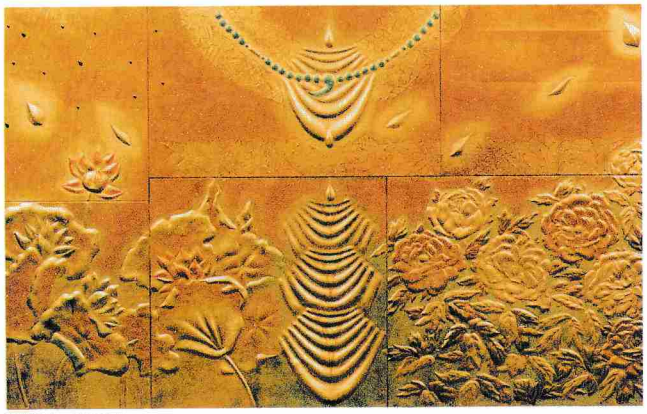
狩猟時代の一つの跡ですわね。

柳澤

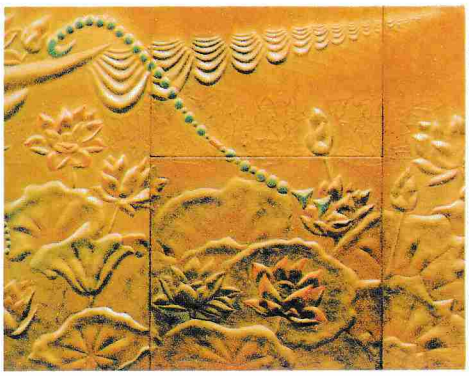
あの貝のフォルムが一種装飾的で、ほのぼのとした人間の生活の臭いみたいなものを運んでくるというふうに思うんですね。そういう人の息づかいのようなものと共に天と地を結ぶ宇宙的な構図というものがあいまっているというふうに思います。

大久保

自分ではそこをねらっているつもりです。人はそれぞれ日本人としての心を表現しようといろんなテクニックを使いますね。私の場合はこの道一筋。これからこの表



「献花」専念寺



現がどう変わってくるかはまだ未知数と思いますけれども。きょうからまた次のステップへ向っていくつもりです。

柳澤

そうですね。そういう意味では先生の作品というのは常にテーマは古代にさかのぼっているようでありますけれども、実はそこから新しさを常にはね返してくる。ですから展覧会を見せていただきましても、次々に新しい展開というものが私たちの心に響いてきて、この次また先生は何をされるのかなという期待感や緊張感を覚えますね。

大久保

一つのところにストップしているということは、これはちょっと勉強の過程としてはゼロですよね。やっぱり少なくとも勉強というものは一歩でも前に進まなくちゃいけないことだと思うんですけれどもね。マンネリになるのが一番困る。

柳澤

そういう新しさというのは作品に向かわれているときに、その制作過程で次なるものが醗酵してくるのでしょうか。それとも普段の生活の中で何かのイメージが増幅されてくるというのでしょうか。両方おありになるのでしょうね。

大久保

両方でございましょうね。私は仕事のあとを見まして、「あっ、まだ私は青春だわ」と思っているんです。(笑)

柳澤

やっぱりそれが新しさを生みだすということなのでしょうね。

それから制作の過程が生々しく出ている作品というのがありますが、先生の場合にはあくまでも静かにやわらかくおさめられる。しかしレリーフされた革のふくらみや影がつくりだすマチェールが不思議な躍動を潜ませているように感じます。既ち絵画のような塗るとか描くということと基本的に異なるマチェールのつくり方に異次元を感ずる秘密があるのでしょうか。そしてそれは大久保先生にしか顕せない世界といえましょう。

大久保

浜岡の展覧会の折に、芸術に造詣の深い市長さんが「半分は材質だけど半分は仕事だ」と。（笑）そしてダイナミックでこれはいいねと言われました。確かに材質もそうだと思います。ですけれども、私は将来にかけて世の中に１点残る仕事ができればよしとしているんです。代表作として残ればいいなあと思っているんですけれどもね。

柳澤

やっぱり常に新しさを追い求めていらっしゃる厳しい姿勢ですね。

大久保

欲が深いんです。（笑）ほかのことは何にも望みませんけれども、この仕事だけはやっぱり真髄から「いいね」ということをおっしゃっていただけると、本当にうれしいと思いますね。

柳澤

非常に繊細な技法による香り高い装飾性と、その底に流れている実にダイナミックな大きなテーマの対比や絶妙な重合が縄文のロマンをうたいあげています。

大久保

作品というものはその人のロマンを表現するものですから。そういう思想的な表現があってほしいということをいつも私は望むんですよ。よく皆さんのお仕事を見ていますと、最近大変平面的ですね。自分がこういう仕事をしているせいかああいうのを見ていましても感動しないんです。だんだん作家の中でも自分の好きな作家と嫌いな作家を色分けしているんです。（笑）

柳澤

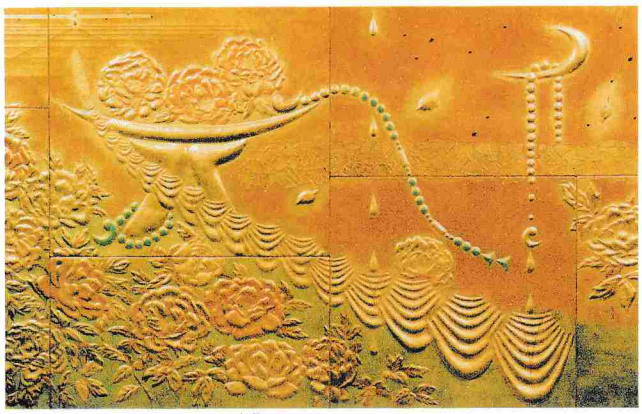
そうですね。建築も何か小器用になってきているという側面もあります。

大久保

ああー、やっぱりね。

柳澤

世の中に感動が薄くなっているのでしょ



「草創の期」静岡県女性総合センター

うか。大きなロマンの流れみたいなものは建築ももちろんですが、芸術の中に流れていなくてはいけないと思いますね。

大久保

世の中が忙しくなったせいでしょうか。

柳澤

例えば19世紀末などでは非常に文化が熟していたと思うのです。いよいよ熟れ落ちんばかりだった。ところが、今世紀末の今、それほど病んではいない。現代人は健康になってしまったのでしょうか。それもロマンを大きく描く人が少なくなっているのかも知れませんね。

大久保

やっぱり時代がそういうことになったんですかね。機械尊重みたいなことで割り切っちゃうことね。それで精神性が非常に乏しくなってしまったんですね。

柳澤

そうですね。人間がやはり人間と立ち向かいながら文化をつくっていくというそういう社会的な状況というものが、もっと別なものがそこに介入してきて、直接的でなくなってきているということなのではないでしょうか。

大久保

忙しすぎるのかしら。かけっこしているような世の中ですね。

柳澤

気持ちは非常にゆっくりしていても足だけは走っていなくてはいけないというような、そんな感じはいたしますね。でもやっぱり走っている中で何か忘れてきてしまったのではないかなという焦燥感はあると思うんですね。

しかし、それが何かというまでは立ち止まって考える余裕がない。何かに余儀無くされて生きている。そういう意味では無意味なスピードに翻弄されないで、どっかりと人間性に腰をおろしておられる先生というのは、現代の中でも貴重な存在だなというふうに思いますね。

大久保

やっぱり自分自体が幸せということですか。芸術家として生きられた幸せを感じるということのように思います。何が芸術であるかということを少しわかって生活しているということだろうと思うのです。これは非常に難しいことだと思うんですけれども、世の中の人は忙し過ぎますよ。

柳澤

自分のために生きるのでしょうけれども、だれのために生きているのかということを考える暇もなく生かされているというのでしょうかね。

大久保

そうです。世の中の波に翻弄されているのね。

柳澤

そうですね。そういう意味ではまさに現代のそういう部分を気付かせる芸術家の役割というのは、ますます重要になるということですね。

大久保

そうですね。これが根本でしょうからね。

柳澤

特に現代人は芸術そのものに入り込んだり、芸術鑑賞などを通じて人間性を取り戻さなくてはいけない時期に、もうとっくにきているのだろうと思います。

大久保

縫い物に半返しとか全返しというのがありますね。今の文化というのはそういうもので、外国からいろんなものを持ちこんで幾分感動したりするのですが、自前の文化にしていない。

柳澤

一気に進んでいけないということですね。行ったかと思うとまた元に戻ってしまう……。

大久保

どうやって進んだらいいかわからない。テレビを見ても漫画、電車の中でもいいお年をした人が漫画を見ているでしょ。ああいうふうに目から入るもので、もうすぐに自分が理解できるというあわただしい世界にどうして生きるのか。もっとじっくりしたらいいんじゃないかというように思うんですね。その中の何人かがこの半返しで行ったらいいなと思うんですけれどもね。

柳澤

心を読んでいないから、心が読めなくなってしまうんですよ。そういう意味では危機的状況の今世紀末という訳でしょうか。

大久保

ええ、そうですね。

柳澤

その心が読めなくなったら、熟した文化というのがなかなか出てこないと思われますね。

大久保

これは評論家の責任もあるでしょうね。

柳澤

確かに正当な批評というようなものが育っていない。

大久保

難しいですね。

柳澤

立派な文化をつくった時代というのはそれが適切にまた充分に働いていた訳ですね。建築などの例でも玉石混交の情報を受けとる若い人たちの選択基準も多様で本流と支流の見分けがつけられない。

大久保

見分ける力ですね。これはなかなか大変ですね。

柳澤

それがはっきりしてこないといけないんです。過激な流れの支流ばっかりをやることがあたかも新しいというような錯覚を与えがちな場面もありますよね。本来

のアバンギャルドはそれまでの流れを変るほどの力を備えていたのです。

大久保
やっぱりそういうことにはある時間を要しますし、そういうことの訓練がちゃんとできる人ということですね。

柳澤
そしてまた国際化が進むほどに、地域や個人の個有性が今ほど重要な意味を持っている時はないとも思いますが。

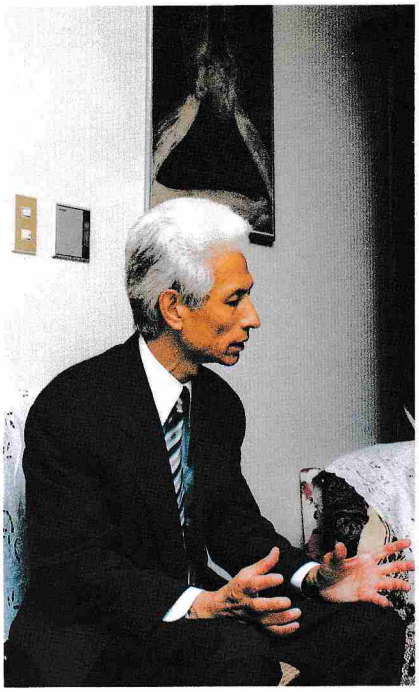
大久保
そうだと思いますね。世界が狭くなりましていろいろなものが来ていますね。そういう中から取捨選択する気持ちとともに自分の血の流れの中に日本人の血の流れというものと、どうドッキングさせていくかという、そういう意味を深く考える人であってほしいと思いますね。

柳澤
そうでないとそこに自分が生きているという意味もなくなってしまう。どこにいてもいいことになってしまい文化を構築するという意味すらもなくなってきてしまうわけでしょうから。

大久保
日本としての文化のあり方ということでしょうね。

柳澤
そういう意味で先生の芸術を生み出すための東京というのはどうでしょうか。

大久保
いいところですよ。
やはり新しい空気を吸いながら古いものを吸収していくという、そういう意味ではやはり箱根山から向こうへ越えてはいけないという感じですね。どなたでも芸術運動を展開する人は、箱根からこちらの東京にいるべきだと私は思います。



「地の詩（うた）」第23回日展

柳澤
常なる新しい情報の波が芸術活動の一つの糧みたいなものだということですね。あまたある情報の中から選択をして吸収する。その点で東京の意味というのは大きいものがあるのですね。

大久保
東京の空気というのは、やっぱり生野菜みたいなもので新鮮ですよね。

柳澤
生活や創作の場が自分を生かしてくれているということでしょうか。それが、東京であり、日本だということになりますね。

大久保
そうですよ。

柳澤
今日はとてもいいお話が聞けました。大変ありがとうございました。創作の原点をかいまみたおもいで静かな興奮がいまだのこっていますが、この辺で――。

どんな質問も寛容に受けいれる先生の語り口は、実に優しく暖かいものであったが、笑みをたたえた二つの瞳の底には、宇宙の果てと現在とを結ぶ壮大なロマンを見据える強い光が輝いているようであった。（柳澤）

この対談は河野建設㈱の協力を得て行われました。

神奈川県立近代美術館 館長
TADAYASU SAKAI
酒 井 忠 康
神奈川県鎌倉市雪ノ下2-1-53
TEL. 0467-22-5000

東奔西走の昨今

宇部や神戸の野外彫刻展はよく知られているけれども、このところ地方で開催される野外彫刻展がたいへんに多くなっている。形式や内容もさまざまであるが、これはおもしろい現象だなと思う。

ながいあいだ現代彫刻に興味をもってつきあってきた関係で、わたしもしばしば相談されるのだが、新しいモデルの提案までにはいたらないでいる。公募形式のもの、あるいは作家を事前に選んで制作してもらうもの、などなど、いろいろやりかたを異にしている。年齢制限のある公募、また大きさの制限をもった公募など、それぞれに工夫をこらしているが、大同小異の感はまぬかれない様子である。

いずれにしろ地方へ出かけて行く機会が多くなった。行けば行ったで、その土地々々の風土や歴史、あるいは人情の機微に触れる（あれこれ義理が生じたりして困ったことにもなるのだが）。しかし総じていえば、未知との出合いがつくる好奇心にかられて、東奔西走しているような昨今である。

せんだっても人口2,000人ちょっとの洞爺村へ出かけて審査にあたった。テーマは、「手のひらの宇宙」。村の有志が「50人委員会」というのをつくって進めている。文字通り手づくりの国際彫刻展なのである。わたしは感激した。

たいてい「中央」のコピーとなる「地方」なのであるが、まったく独自の発想ではじめられている。明治以降の「近代」が「地方」を「中央」に従属させてきた構図は、もう役に立たなくなっている。にもかかわらず、なかなか「地方」からの発信がきかれない。

しかしこのところ各地で開催されている野外彫刻展とつきあって感じる印象は、地元意識の変化である。一部の頑迷固陋な人たちの地域エゴでは対応できなくなっているのである。明日のことはわからないが、いま、なんとなく「地方」がおもしろい、そんな気がしている。

東京芸術大学美術学部長
KIICHI SUMIKAWA
澄川喜一
東京都台東区上野公園12-8
TEL.03-3828-6111

出合い

昭和25年9月キジャ台風が襲来した。岩国に錦帯橋がある。五つのアーチ型の木造橋で中間の三つのアーチは橋台の石組みから桁を少しづつ迫出しアーチ型を作りながら伸びている。隣りの橋台から同じ様に伸びてきた桁先きとドッキングしているから橋脚は無い。橋台の側に行き大きな石組みに触れながら橋の裏側を眺めるのが楽しみだった。複雑な木組みがリズミカルに空中高く伸び木で造られた虹のようだった。よく写生に行き将来は画家になろうと思っていた少年の頃である。運命の日が来た。いつもの穏かな清流が豪雨のため激流となり渦巻いていた。

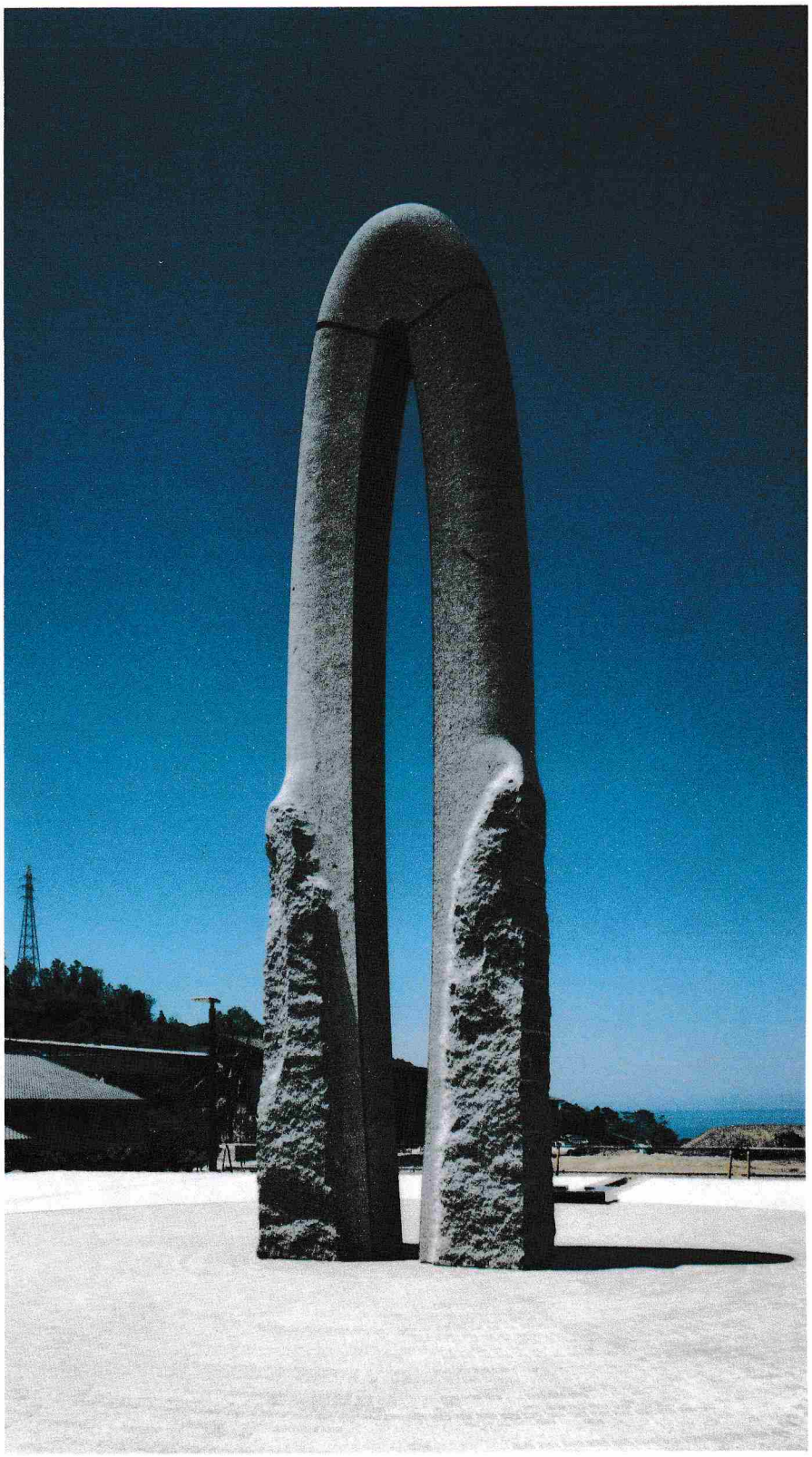
目の前であのびくともしない筈の石組みが崩れ始めた。橋台から離れたアーチ形の大橋が濁流に浮びしばらくそのままの形で流れたかと思う間もなく大きく捩られてバキッボキッという人が骨を折られるような悲痛な叫びを残して激流に呑まれてしまった。何故か涙が止まらなかった。

数日後、川下で橋の残骸を見た、私の大好きなあの美しいかたちだった橋が無惨にも引き千切られ大きな船の龍骨を圧縮したような木組みの塊となってあちこちでころがっていた。

現代彫刻のような、いや、もっともっと強烈な、神さまのインスタレーションと思える程の迫力だった。体が震えたことを覚えている。創建以来277年生き続けた橋の最期に出会った記憶は今も鮮明に残っており時折り夢の中に表われる。

山並みや川の流れは変らないのに橋の無い風景は絵の中にポッカリと穴があいたような風情で間の抜けた空間になってしまった。

昔の匠人達は橋の構造を考え、松材や桧材を適材適所に使いながら景観に最も適した橋の「かたち」を考えたのだろう、環境造形の妙といえよう、頭の下がる思いである。彫刻家になろうと志を立てた40余年前の忘れ得ぬ出合いだった。



大成建設㈱営業本部 営業部長
MASAHIRO KURAMOTO
倉 本 真 弘
東京都新宿区西新宿1-25-1
新宿センタービル
TEL. 03-5381-5105

「大連」の想い出

私は子供の頃、中国の遼寧省大連市で育ちました。戦後1948年に日本内地に引揚げる迄14年間住んで居ましたので、当時の事はかなり正確に覚えているつもりです。

当時の大連市は、人口80万人といわれ、市の中心部には、各所に円形の広場があり、その広場から放射状に広がる道路とその街並みは、アカシヤやポプラの並木と相俟って、ヨーロッパ風の美しい景観とロマンチックな雰囲気をかもし出していた。又住宅地は、地震が全く無いせいか、練瓦造で2階建にほぼ統一され、赤、青、緑とカラフルな屋根瓦、外部は夫々趣向を凝らしたデザインで比較的、落ち着いた色彩の仕上げを施し、大変美しい町であったという印象が瞼の奥に今も鮮明に焼き付いています。

昨年9月に大連市に於て、大久保婦久子先生の作品展が、日中正常化20周年記念事業として、大連市の主催で開催されました。

私も、文化大使としての大久保先生を取り巻くツアーの一員として参加する幸運に在り付き、なつかしい大連を訪れる事になりました。

久し振りに見る大連の現状と、頭の中に描いていたその姿とが、余りにも懸け離れていた事に先ず驚きました。

大連市の人口は530万人にふくれ上がり市街地の周辺に広範に散在していたスラムやバラック、又郊外に広がる農場、果樹園、ゴルフ場等は、悉く取り払われ、5～6階建の集合住宅の団地に様がわりしていました。

市街地は新しく建てられた高層のホテル以外は昔のままのたたずまいを残しているが、建物の維持管理に関しては、全く無関心で、長い間の埃や煤煙をかぶり、カラフルな町が、灰色の町に変ってしまい、本心がっかりいたしました。反面、経済都市として市内は活気に満ち溢れ、特に金州方面へ延びる工業団地を中心とした開発区には目を見はらせるものがあります。

中国は1960年代の文革時代、1970年代の国際関係発展時代、1980年代からの対外開放政策展開時代を経て、1990年代は、上海、深圳、大連、を核として、すさまじい勢いで経済発展を展開中であります。

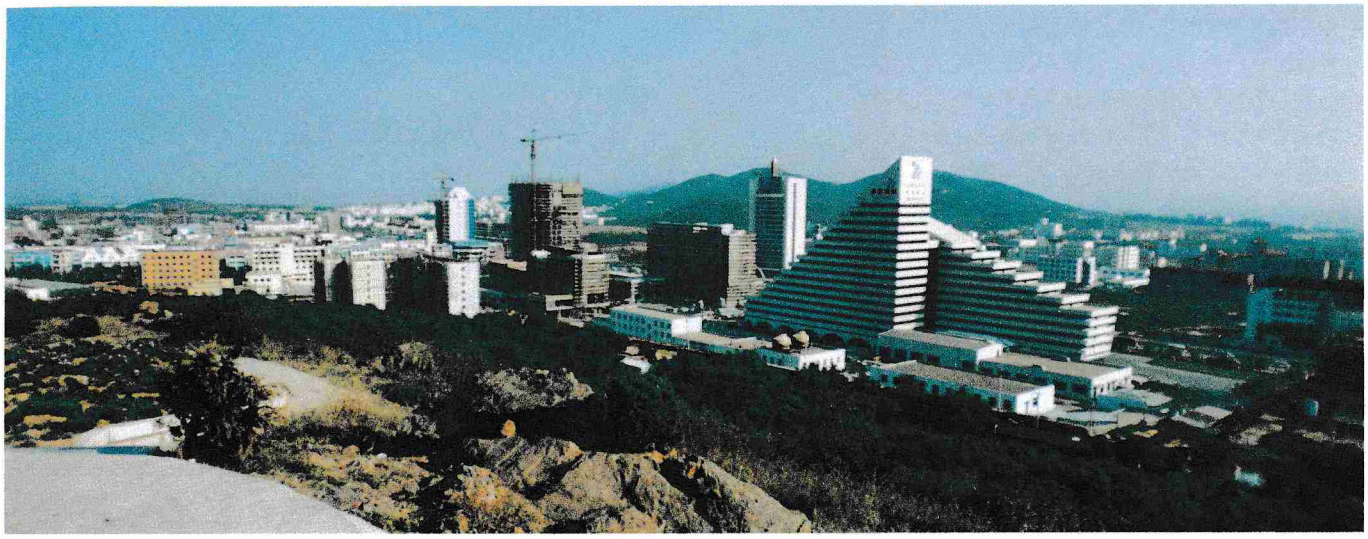
1972年の日中国交正常化初年度は、日本の対中国貿易額は11億ドルであったが、昨年度の対中国貿易額は289億ドルで、世界で第5位の貿易相手国になりました。この20年間で何と26倍に増えた事になります。

特に、大連工業団地を中心とする開発区は100mの幹線道路が完成間近かの大窯湾新港と大連～瀋陽高速交差口とを結び、理想的な投資環境を形成している。

すでに日本の企業もキャノン、東芝他数社が工業団地に進出しているが、再に10社余りが進出する予定になっている。投資範囲は自動車部品、電子、セメント、服装、包装の分野にも及んでいる。

工業の発展と同時に心配されるのが、環境保護対策である。石炭燃焼による大気汚染、工場廃液による水質汚濁、製鉄所やセメントから排出される塵芥による公害等である。

経済発展期を迎えた中国に対し公害対策を優先せよという身勝手な事は言えませんが、かつて日本が体験した悲惨な公害の実態を、声を大にして中国に知らせたいと思う。虚飾の外交辞令を交すより質実率直に語り合う事こそ真の日中友好の鍵であると思う。



「楽しかった雨の建物めぐり」
—徳島・香川研修旅行記—

大出幸夫（常務理事、事務局長）

11月11日から2泊3日の旅行は、天候（曇りと雨）に恵まれ、しっとりと中味の濃いものになりました。雨の徳島空港で出迎えてくれた琴電バスに乗りこんだ28名の会員は、先ず空港近くの大塚製薬に案内され、巨大トマトにびっくり。ぶどう棚のように広がる枝に実る赤いトマト、四本の幹から既に数万ヶを収穫したとのこと。隣りのホールには直経1mもある杉丸太が、くの字に曲げられており、前の池には小判型の大きな石が噴水で持ち上げられていたのです。（速水史朗氏作）いずれも常識破り—発想の転換—創造への挑戦を暗示していました。

昼食は300年前の民家を琵琶湖畔から移築した“阿波の里”のはなれで、京都から馳けつけてこられた設計責任者である建築家の木下龍一氏からお話を伺いながら味わいました。葦ぶきのどっしりした屋根の下で賞味する阿波遊膳はぜいたくそのもの。庭には葉の落ちた柿がたわわに光り、ここのオーナーが製菓会社だと聞いて又びっくり。

午後は白いヨットがいっぱい浮かぶ河岸に立つ11階建ての茶色の建物、徳島県庁を見学。設計から施工、中の照明や設備、壁画に至るまで会員の作品が多く採用されていました。途中、藍染の実演などを見せる徳島工芸館に立寄ってから大塚製薬の迎賓館“潮騒荘”で1日目のわらじを脱ぎました。さて、徳島と言えば阿波踊り、広いロビーで地元連の方々が模範演技を披露され、われわれも上手に踊りのコツを伝授されること1時間、やっとサマになった時には皆汗びっしょりでした。

今回の旅の団長である中島事業委員長と倉本氏夫人、村上慶子さんの3人が技の優秀さを認められて地元連から認定証を貰い全員から拍手をうけました。翌12日は早朝美しいカンツォーネを唱ってくださった仙台の会員吉田さんを送ってからうず潮見物、午前10時過ぎ、観潮船の2階デッキからうず潮のすごさを眺めているとビョーッ、ビョーッと汽笛を鳴らしながら大型貨物船がまっすぐに近づいてくるではないか。ぶつかる寸前わが観潮船が右にカーブを切り、危機一髪難を免かれました。文字通り海の暴走族まかり通るの図そのもので、船を降り、昼食に本場さぬきうどんを食べ終る迄、ニアミスの話でもちきりでした。

徳島から海岸沿いに小雨の中を高松へ向かい、田畑に点在する瓦屋根の豪勢な民家を眺めつつ雲のかかる屋島近くの故イサム・ノグチ氏のアトリエを訪ねました。この辺は良質の石が産出され氏は多くの作品に挑戦して、未完の彫刻を含め100点余りがアトリエ近くに置かれていました。地元の建築家で、ヘルシンキオリンピック三段跳びの選手でもあった山本氏から、ノグチさんは生前から墓処をこの地に決めていたこと、ノグチ記念財団設立の話が今、日本と米国で進められていることなどを伺いました。

三日目もバスの中から小雨にけぶる紅葉や黄金色のミカンを眺めたり、雨が止んで瀬戸大橋や大小の島々を遠望しながら山本氏設計の歴史民族資料館に立ち寄り、丘の傾斜と岩石を利用した設計のたくみさを教えられました。瀬戸内海の魚を取る用具を主体に、歴史、考古資料まで巾広く展示されており、生活の知恵が文化の源泉になっていることがよく判ります。バスは名所旧跡の近くを通りながら、丸亀駅前の猪熊弦一郎美術館へ。赤・黒・黄色の作品を前面に置いた舞台のような建物正面は親しみ易く、中の展示室もゆったりとしていてシンプルで、猪熊先生の作品が私達に「みんな、頑張ってね」と暖かくほほえみかけているようでした。美術館近くの由緒ある料理屋でいただいた京風料理は、庭園や建物とマッチして本当に素晴らしかったです。見学コース最後に、現存する最古の芝居小屋（金丸座）をこんぴらさんのふもとにたずね、舞台下の奈落をのぞいたり、江戸時代後期の木造建築のしたたかさを黒光りした柱をなでて確かめました。

以上で見学は終了、高松空港に着いてガイドさんと拍手で別れてから「飛行機は霧が深くて発着できません」とのアナウンスがあり、2度目のびっくり。バスの運転手さんも事情を了解してくれて、再度徳島空港まで100kmの国道をひた走り、8時の最終便に間に合うことができました。それにしても旅行を早くから準備して下さった三木さんを始め事業委員会の皆さん御苦労さまでした。また、物心両面からサポートしていただいた大塚製薬の方々に厚く御礼申し上げます。

発行：社団法人日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax 03-3457-1598
〒108 東京都港区芝5-26-20
建築会館6F
振替：東京 1-365085
編集：(社)日本建築美術工芸協会広報委員会
柳澤孝彦(委員長)、宇津野和俊(副委員長)
大多了介、坂上みつ子、崎山小夜子
高部多恵子、玉見 満、冨田俊男
製作協力：㈱SP建材エージェンシー

THE HUMAN DIMENSION FROM KOTOBUKI

人に愛され、街にとけこむ。
そんなパブリック・アートを提案しています。

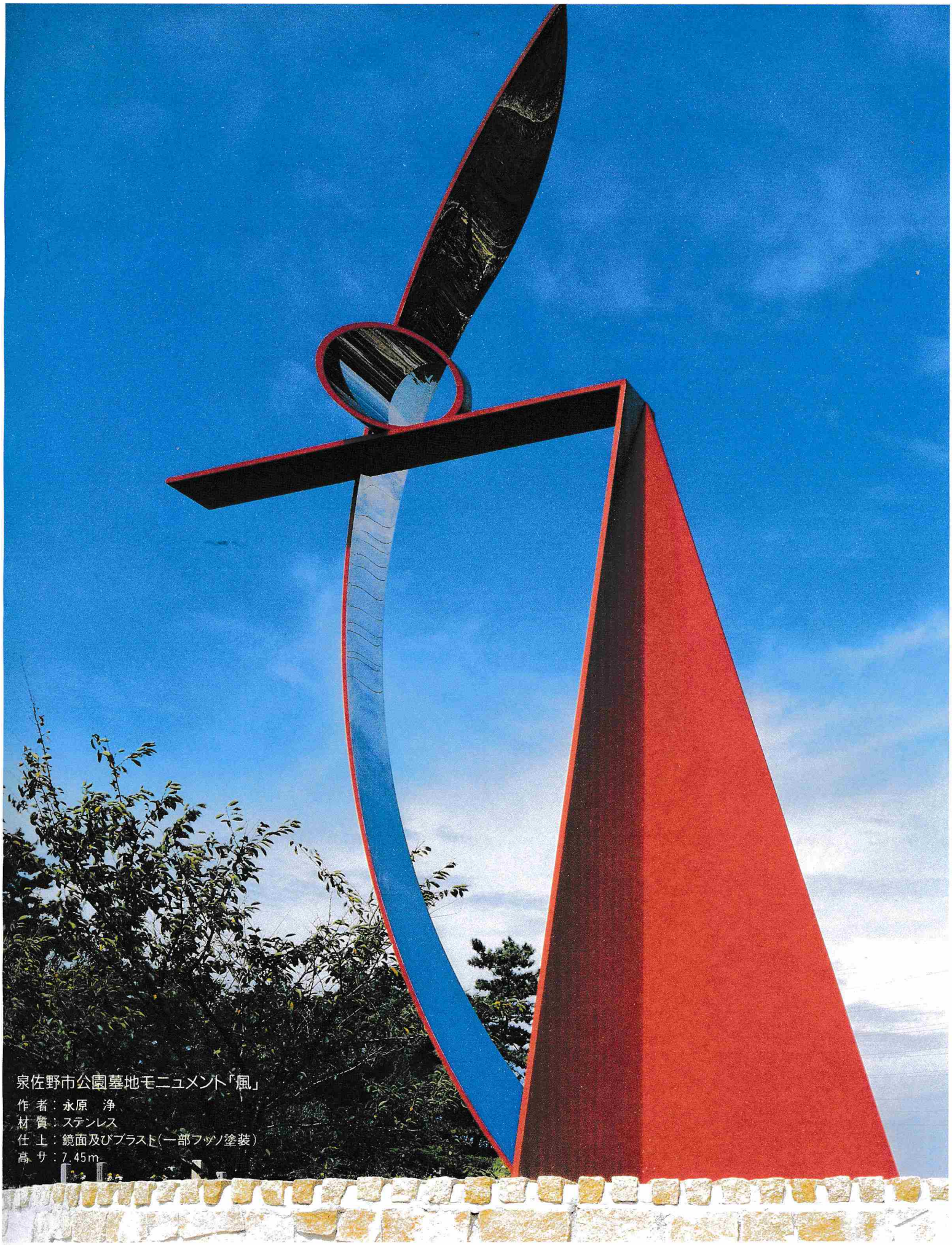
▲静岡市谷田宮の後公園／静岡県
だいらぼっちの夢／高田 大

K・O・T・O・B・U・K・I

株式会社コトブキ

●タウンアート事業部……Tel.03-3591-0576(直)
本社：東京都千代田区有楽町1-2-12 〒100 Tel.03-3591-1311(代)

札幌011-221-3496/青森0177-43-7321/秋田0188-63-9511/盛岡0196-25-0713/東北022-284-1011/水戸0292-25-8222/北関東0286-62-7251/千葉043-275-2161/埼玉048-644-5275/
武蔵野0422-53-8221/横浜045-471-7151/新潟025-243-2216/長野0262-28-9722/静岡054-282-8792/名古屋052-773-4321/京都075-371-3221/大阪06-396-5111/金沢0762-47-7422/
神戸078-271-8585/岡山086-246-0818/高松0878-51-9140/広島082-230-1261/山陰0852-22-7511/九州092-441-0763/長崎0958-64-0102/鹿児島0992-58-2361/沖縄098-863-7803



泉佐野市公園墓地モニュメント「風」
作 者：永原　浄
材 質：ステンレス
仕 上：鏡面及びブラスト（一部フッソ塗装）
高 サ：7.45m

写真撮影：村井　修

METAL ARCHITECT
KIKUKAWA

菊川工業株式会社　本社　〒130 東京都墨田区菊川2-18-10 TEL03-3634-3231（代表）

素材は文化を変える

CERAMIC ARTS

神話Myth　140×110cm

大久保婦久子作

大塚オーミ陶業株式会社

東京/〒101 東京都千代田区神田司町2-9 TEL.03(3294)1388

大阪/〒540 大阪市中央区大手通3-2-21 TEL.06(943)6695

【営業品目】●美術陶板●建築陶板●テラコッタ●写真陶板
●サイン、マザイン陶板●肖像陶板